

株式会社堺伸銅所

— “水回り”を支えるパイプ金具の共創メーカー—

会社概要

岡山工場 岡山県勝田郡勝央町太平台 51-1
 本社 大阪府堺市堺区竜神橋町 1-1-5
 (経理総務課) はり源ビル 503
 代表取締役社長 嘉瀬井 毅
 創業 1933 (昭和8) 年6月10日
 設立 1947 (昭和22) 年12月23日

資本金 ● 1千万円
 売上高 ● 10.4億円 (2018年3月期)
 従業員数 ● 40人 (パート含む)
 事業内容 ● 銅管・合金管の材料製造及び加工全般
 U R L ● <http://www.sakaishindousyo.com/>

株式会社堺伸銅所は、水栓パイプ金具の国内シェア7割を占めるトップメーカーである。水栓金具とは、いわゆる「蛇口」まわりを構成する給排水管のことで、キッチン、洗面台、トイレなど身近な生活の場に同社製品は溶け込んでいる。

◆大阪・堺の地で創業

嘉瀬井毅社長の祖父・森徳聖氏が大阪・堺の地に、黄銅管を製造する合資会社堺伸銅所を設立したのは1933 (昭和8) 年である。1947 (昭和22) 年に株式会社に組織変更、1954 (昭和29) 年には溶解炉設備を新設し、銅・黄銅管を一貫製造する工場となった。

同社の分水嶺は、1965 (昭和40) 年の東洋陶器 (現 TOTO) との取引開始である。これを機に衛生管・水栓機器関連の黄銅管専門メーカーとなった同社は、オイルショックの不況期などを乗り越えながら、INAX (現



大手ホームセンターで実際に市販されている製品

LIXIL) など他社へも取引を拡大。バブル期には住宅着工戸数増加という追い風もあって、業績は急成長を遂げ、業界で確固たる地位を確立した。これは材質管理から始まる同社の高度な部品精度が、供給先メーカーの技術的要求を叶え続けてきた結果でもあった。

◆岡山・勝央工業団地に全面移転

2代目社長の嘉瀬井達彦氏 (現・相談役) は、一世一代の決断を行なっている。堺工場は周辺の宅地化で拡張余地がなく、騒音・排水の問題もあって、移転の必要に迫られていた。嘉瀬井相談役が移転先として選択したのが、距離にして150 kmを超える岡山県・勝央工業団地であった。他に近畿圏の候補地もあった中、まったく馴染みのない岡山の地を選んだ理由として、同社は純粋に工業用地としての適性を挙げる。実際、同団地には大正製薬や東和薬品など大企業の工場も多く立地している。

本社機能の一部は堺に残したものの、製造販売拠点は全て岡山工場に移るため、従業員にとっては転居を伴う会社の決断であった。事実、中堅どころの人材の多くが会社を去ったという。それでも嘉瀬井相談役の大きな経営判断は、環境やコスト、安定供給などその後、取引先ひいては社会的にも要請される厳しい水準を満たす土台となり、会社の持続的成長に不可欠であったと嘉瀬井社長は振り返る。

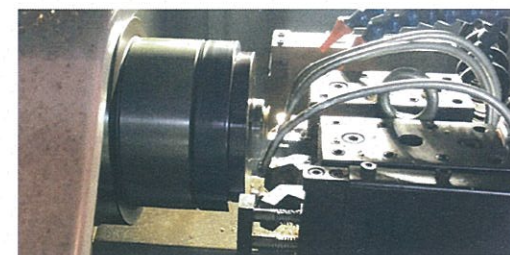
◆材料メーカーから共創メーカーへ

嘉瀬井社長は工場の全面移転が完了する前年の2000 (平成12) 年に入社。生産と出荷を継続しながらの移転作業であったため、生産管理には苦勞したという。また退職者を補充するため、地元での人材確保にも奔走。この経験は、現在の採用活動にも生かされ、高校や技術専門学校への講習会参加や教職員との交流などが功を奏し、同社では毎年新卒人材を確保している。

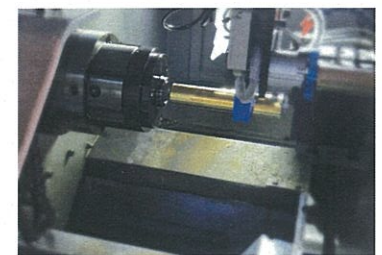
同社は曲げ加工をはじめ、ねじ、切削、端末など様々な加工をパイプに施している。2007 (平成19) 年、単なる材料供給では生き残れないという危機感を抱く嘉瀬井社長は手始めに中古の曲げ機械を導入する。加工分野に積極的に取り組んだ結果、現在の同社はスピニング加工^(注1) はじめ塑性加工全般を得意とし、材料販売の比率は2割まで減少、加工販売が8割と大きく逆転している。何よりこのユニット供給は、商品開発段階から受注先との強固なパートナーシップがあるからこそ成り立つものである。2014 (平成26) 年に3代目社長となった嘉瀬井社長は、銅管パイプのみを供給する材料メーカーから「共創メーカー」へと、同社を生まれ変わらせている。

◆知恵と自動化で好循環

同社の技術開発に取り組む姿勢を物語るのが、工作機械メーカーと共同開発したNC旋



ロボット化で熟練した職人の手作業を再現、一般的にはスピニング加工には使わないNC機械で完全自動化を実現



(注1) 平面状あるいは円筒状の金属板を回転させながらへらやローラーと呼ばれる棒を押し当てて少しずつ変形させる加工方法。同社では曲げ、端末加工が該当する。



社長
嘉瀬井 毅 氏

学生時代は競歩の選手。国体、インカレ出場もオリンピックには「二歩手前」であった。趣味はジョギング、月間11標走行距離は42.195キロ。社長就任を機に家族は大阪へ、単身の自炊生活を送る。

盤機械である。この機械はスピニング加工の完全自動化を実現、24時間稼働を可能とし需要増加に対応している。ほかにもパイプ同士をつなぐ接合方法は、人手によるろう付けが一般的であるが、その自動化にも取り組んでいる。同社では上記のような自動化を達成すると、その浮いた人員を新たな開発や研究へ投入する。それは生産設備である金型の自社製作にも及び、社内の人材のみでやりくりしたにも関わらず、僅か2年で実用化にこぎつけたという。まさに生産性向上と人材育成における好循環のお手本である。

同社の売上げの8割は水栓関係向けであるが、最近では給湯機の配管を受注、今後は空調機、航空機、医療機向けなどの「ヨコ展開」を嘉瀬井社長は見据えている。さらに、銅以外の新素材の加工にも挑戦する方針である。決して目立つことはないが、同社の製品は私たちの生活を今後も支え続けていく。

(当研究所 北村哲彦)